

### 感染症を克服するための多角的アプローチ

オーガナイザー  
松本靖彦 (明治薬大)  
鴨志田剛 (京都薬大)

近年、新型コロナウイルス感染症に限らず、細菌や真菌による新興・再興感染症が世界中で問題となっている。これら感染症は、薬剤耐性の問題と相まって、既存の治療薬やヒトが獲得した免疫だけでは制御できない。新興・再興感染症は、人類の健康への影響のみならず、その感染対策のための費用の問題を含めた経済などのあらゆる面の人間活動に重大な悪影響を及ぼしている。新型コロナウイルスが猛威を振るう昨今、一般の人々の感染症や感染対策

に対する意識が大きく変化している。このような状況下で、感染症克服に向けた基礎研究・基盤技術に応用した感染症対策の考案や診断薬および治療薬の開発は推進すべき研究課題である。本シンポジウムでは“感染症を克服するための多角的アプローチ”と題し、様々な薬学領域で活躍する若手研究者に、植物感染実験、実験室進化、ゲノム解析、ケミカルバイオロジー、生化学、高効率遺伝子組み換え法の開発といった多岐にわたるアプローチでの細菌・真菌感染症研究についてご講演いただく。専門領域を超えた新たな発想による新規感染症制御戦略の開発につながることを期待している。  
(松本靖彦)

### モノトリエンス アップトゥデート

オーガナイザー  
森川敏生 (近畿大薬総研)  
久保田高明 (岡山大院医歯薬)  
荒井雅吉 (阪大院薬)

生物が生命現象に伴って生産する天然有機化合物(天然物)を単離してその構造を決定する、いわゆる“モノトリエンス(MONOTRIENES)”は、天然物化学の根幹をなす研究手法として認識されている。モノトリエンスにより得られた生物活性を有する天然物(活性天然物)は、医薬品やバイオプロダクトのシーズなどとして重要であり、時として新規天然物の発見が新たな研究領域の創成につながる。

本シンポジウムでは、多様な天然物研究の根底となるモノトリエンスに着目し、新規天然物探索において最前線で活躍されている4人のシンポジストから、それぞれ「薬用植物から得られる化学的に不安定な成分を使用した機能性化合物の開発研究」「藍藻の天然物アップトゥデート」「細菌間相互作用様式の解明を目指した天然物研究」「天然物に学ぶ:Nocardia属放線菌成分」と題した演題で新たな天然物を発見する意義とその醍醐味について講演いただくと共に、各専門領域でのモノトリエンス研究の重要性について活発に議論したい。  
(森川敏生)

### 第7回病院薬剤師が実践する リバーストランスレーショナルリサーチの最前線 —臨床データを薬学研究に還元する

オーガナイザー  
増田智先 (姫路獨協大薬)  
伊東弘樹 (大分大病院薬)  
池田龍二 (宮崎大病院薬)  
城野博史 (熊本大病院薬)

近年の目覚ましい科学技術の進歩に伴い、多様な臨床情報の取得が可能となり、治療標的分子の同定およびその機能を制御する分子標的薬をはじめ、多様な創薬モダリティを活用した従来にはない新規医薬品が大きな成果を生み出しつつある。一方、実臨床においては、臨床試験で集積されたエビデンスだけでは解決できない症例も多く、臨

床経験を有する薬剤師自らが試行錯誤を繰り返しながら新たなエビデンスを創出することが、より適切な薬物治療の実践には不可欠である。本シンポジウムでは、臨床と基礎の双方にチャンネルを有し、最先端の技術基盤に基づいたエビデンス創出を目指す薬剤師の創薬・育薬研究について、臨床薬剤師ならではの着眼点、いち早く臨床に還元し得る環境を生かした臨床薬学的研究の意義と重要性についてご紹介いただき、病院薬剤師が取り組むべき研究の現状、問題点、今後の展開について考えたい。  
(城野博史)

### 地域医療を支える薬学研究を基盤とした 薬物療法の実践

オーガナイザー  
吉山友二 (北里大薬)  
野田敏宏 (北海道薬剤師会)

薬剤師が地域医療において活動する時、幅の広いそして決して浅くない知識と能力が必要となる。地域医療の様々な場面で人々の身体状況を観察・判断し、状況に応じた適切な対応を担うことは間違いない。薬学実務教育が拡大する中で、医療系の人材としてのセンスと質を具えた薬剤師の役割が大きいと期待されている。地域医療を支える薬剤師の役割や機能を考え、薬剤師の資質の向上とわが国の地域医療の発展に寄与したい。

地域医療に直接関係する医療人としてその職能を発揮するために必要な知識・技術の基本となる一つに薬学がある。地域医療が必要としている斬新な対応策を始動させなければならないと考え、地域医療の第一線を意識してシンポジウムをオーガナイズした。地域医療の実践に薬学の知識の重要性を事例検証することは大変意義深い。本シンポジウムでは地域医療を支える薬学研究の取り組みと実践の現状を確認し、その中で今後の方向性について議論を深めたい。本企画で得られた最新情報を活用することが薬学関係者の腕の見せどころと確信している。  
(吉山友二)

### 薬学の未来を創造するアントレプレナー教育

オーガナイザー  
森岡弘志 (熊本大院薬)  
甲斐広文 (熊本大院薬)  
井上浄 (リバネス)  
弘津辰徳 (サイディン)

アントレプレナーシップは、起業をするために必要な能力と一般に捉えられている。しかし、その解釈は幅広く、社会課題を解決するため、新たなアプローチで好奇心を持って挑戦し続ける姿勢や能力であるとわれわれは考えている。薬学は、多様な専門分野を学ぶことができ、卒業時には多分野にわたる知識を持つことになる。従って、薬学人

材がアントレプレナーシップを身につけることにより、リーダーとして世界が抱えるあらゆる課題を解決できるポテンシャルを秘めている。このような背景から、熊本大学薬学部では、2017年から学部1年生を対象に、アントレプレナーシップ育成講座(iHOPE: Innovative Healthcare-Oriented Program for Entrepreneur)を、また、21年から実践編として、大学院生を対象にiHOPE NEXTを開講した。本シンポジウムでは、これまでの活動報告に加え、履修した学生の変化やアントレプレナーシップの重要性について議論する。  
(弘津辰徳)

### 超硫黄分子を軸にした 生命原理変革と創薬・医療への応用

オーガナイザー  
西田基宏 (九大院薬)  
中川秀彦 (名大院薬)

元素周期表の第16族に属する硫黄は、生命の起源より生体エネルギー産生に関与する生命素子として注目されている。硫黄原子は、酸素よりも電子授受能に富む化学特性を持ち、生体内や食物・自然環境中にも豊富に存在するものの、その化学的反応性の高さが原因で、生命活動における動態を捉えることは困難であった。最近、生体内の硫黄原子が連結した構造をした超硫黄分子として産生され、真核生物・哺乳類のミトコンドリ


アのエネルギー代謝を管理するだけでなく、求核性・親電子性の両面性をもつことで形成される物理化学的特性が生体内の様々な環境応答・適応を担うことも分かってきた。こうした実績をもとに、超硫黄分子の簡便な計測技術開発や生物学的意義の解明を目指す国内の研究者が集い、学術変革領域(A)「硫黄生物学」が立ち上がった。本シンポジウムでは、最先端の超硫黄生物学研究を推進する医薬系研究者を招き、その成果を紹介していただき、これを基盤に出口戦略(医療応用)の可能性についても議論したい。  
(西田基宏)

**電子書籍** **医薬品GLPと毒性試験の基礎知識 改定新版**

**毒性試験とガイドライン、GLPとその運用の全てを1冊で解説!**

Kindle 価格: ¥1,100(税込) 馬屋原 宏 (著)  
出版: 22世紀アート

内容の詳細とお買い求めはQRコードより Amazonのサイトから。 →



**薬事業務に関わる法律確認・理解のための定番書!**

**薬事衛生六法 2023** B5判変型/約2,100頁 定価5,500円 (本体5,000円+税)

医薬品医療機器等法及び関係政省令、告示を中心に薬剤師法、毒劇、麻薬、医療保険、保健医療など薬事・医療・衛生関係法令を幅広く収載した法律書。  
【内容は2023年2月13日現在】

3月下旬 発売予定

◆詳細は随時、薬事日報社オンラインショップへ掲載予定 (<https://yakuji-shop.jp/>)